

第2章 山野貝塚の概要

第1節 地理的環境

1. 東京湾と東岸貝塚の地理的区分および山野貝塚の位置づけ

北海道から沖縄にいたる日本列島の沿岸部には多くの貝塚が残されている。日本列島における貝塚の分布状況をみると、噴火湾、仙台湾、古鬼怒湾、東京湾、三河湾、伊勢湾、瀬戸内海、有明海などにおいて貝塚の分布密度が高いことが理解される（樋泉 2014、第1図）。これらの地域は比較的閉鎖性の強い内湾水域や河口域に陸から多量の有機質が流入することにより、生物生産が活発化し、また有用貝類の生息地となる浅瀬や干潟が広いことからこれらの貝類が大量に繁殖する。東京湾および古鬼怒湾では約6,000年前をピークとするいわゆる「縄文海進」により両湾の奥深くまで海水が入り込み、東京湾においては現在の荒川や江戸川の低地に沿って奥東京湾が形成され、現在の東京湾に注ぐ河川の河口付近にも多くの入り江が形成された。河川から豊富な栄養素が流れ込むこれら入り江の沿岸には、縄文時代前期以降多くの貝塚が分布することとなった。さらに東京湾の干満差によって生じる潮流は、東京湾の東岸に広大な干潟を形成することとなり、東京湾の東岸に数多くの貝塚を形成させる要因となったと考えられている（村田 2013）。

東京湾東岸に位置する千葉県内には縄文時代の貝塚が644箇所と日本で最も多く所在し、全国の縄文時代の貝塚の約27%を占める（文化庁文化財部記念物課 2013）。第2図は千葉県内に最も貝塚が多く形成された時期の1つである縄文時代後期前葉を含む後期～晩期の貝塚の分布を示したものである。なお、東京湾全体の該期の貝塚分布を把握するために、対岸の神奈川県や東京都、奥東京湾に相当する埼玉県等の代表的な貝塚の分布状況も併せて示した。千葉県内の分布状況をみると、県北部中央～北東部の古鬼怒湾水系と奥東京湾～東京湾東岸に貝塚が密に分布しており、特に東京湾東岸においては現在の野田市から木更津市にかけて大型貝塚が連続と分布し、山野貝塚はその最南部付近に位置することになる。

西野（2004）は東京湾東岸の貝塚群を含む千葉県内の貝塚について、年代的にはⅠ～Ⅷ期に区分し、地域的には奥東京湾、東京湾、古鬼怒湾、九十九里・太平洋岸等に区分して整理した。それによると、縄文時代後・晩期の東京湾東岸の貝塚群は、年代的にはⅤ期（中期後葉～後期初頭）、Ⅵ期（後期前葉～中葉）、Ⅶ・Ⅷ期（後期中葉～晩期）に、地域的には奥東京湾、奥東京湾湾



第1図 日本列島における縄文貝塚の分布概況（樋泉2014）

口部、東京湾湾奥部、東京湾外湾部に該当する。山野貝塚はVI、VII期に東京湾湾奥部に所在する遺跡として位置づけられている。

ここでは山野貝塚が形成されたVI期～VII・VIII期（後期前葉～晩期）について、東京湾の環境的特性および上記の西野の年代・地域的区分を踏まえ、以下のように東京湾と貝塚分布の地理的区分を設定した。

多くの貝塚を形成する要因となった東京湾は、狭義には房総半島の富津岬と三浦半島の観音崎を結ぶ線以北の内湾を指すが、広義には房総半島西端洲崎と三浦半島の剣崎を結ぶ線以北の浦賀水道（外湾）を含めた水域を指す（貝塚 1993 他）（第2図）。東京湾および周辺の地形をみると、内湾周辺の陸上地形は台地や低い丘陵で、内湾の海底地形は中央部が水深 50 m より浅く平坦な泥質底であり、沿岸部は水深 5 m 以浅の平坦な砂質底や干潟が連なる。一方、外湾周辺の陸上地形は高く起伏のある丘陵となっており、海底地形は沿岸部の水深 40 ～ 50 m 以浅の岩礁地帯、水深 50 ～ 100 m の溝状の地形をなす観音崎海底水道、浦賀沖の水深 100 m から相模湾底の水深 1000 m 以深までつづく東京海底谷となる。このように、内湾と外湾では陸上および海底の地形が大きく異なり、その自然環境の相違によりそれぞれ生息する生物相も異なってくる。

また、前述したように縄文海進により現在の荒川や江戸川の低地に沿って奥東京湾が形成され、縄文時代後期においても現在の野田市～流山市付近まで海水が入り込んでいたようである（小杉 1989）。このことから、本報告では、縄文時代後・晩期の東京湾を、「奥東京湾」、「内湾」、「外湾」に大きく3区分する。

さらに、貝塚の特徴に基づいて、内湾を千葉市都川と汐田川の間を境として、北側を「湾奥部」、南側を「東岸」に区分する。両地域における縄文時代後期貝塚の貝類組成をみると、湾奥部はオキアサリの出現によって特徴づけられるのに対し、東岸はイボキサゴ・ハマグリを主体とすることによって明確に区分され（樋泉 2014）、地形や考古学的事象からも両者を区分することができる。

縄文時代後・晩期の東京湾東岸の貝塚群は、奥東京湾から内湾東岸（現在の野田市から木更津市付近）まで連続と続いていくが、市原市西広貝塚を南限として、それ以南においては分布がまばらとなる。このことから、内湾東岸については、貝塚の分布密度が高い都川～養老川流域を「東岸北部」、貝塚の分布密度が希薄となる小櫃川～小糸川を「東岸南部」に細分した。なお両地域の境界は、東京内湾の魚介類層の境界である「多摩川－姉ヶ崎線」（多摩川河口と市原市姉ヶ崎を結んだ線。工藤 1997）と概ね一致する。

以上の地理区分に照らし合わせると、山野貝塚は内湾東岸南部に位置することになる。この地域において、かつては木更津市祇園貝塚が最南部に所在する大型貝塚であったが、十分な調査が実施されないまま消滅してしまったため、現在は山野貝塚がその位置づけとなっている。

ここで内湾東岸における貝塚の研究状況をみると、東岸北部の都川－村田川流域の貝塚群については動物遺体の分析資料が蓄積され、遺跡単体のみならず遺跡間の関係性についても論じられてきている（樋泉・西野 1999 他）。それによると、貝類組成については貝塚間での斉一性が高いのに対し、魚類組成については立地を反映した多様性が認められ、資源利用における季節性や集落間の調整などが働いていた可能性が指摘されている。また、養老川流域においても、多くの貝塚（西広・祇園原・武士など）でデータの蓄積と様相の解明が進められている。

これに対して、山野貝塚が位置する東岸南部においては、いまだ貝塚の解明やデータの蓄積が進んでいない。上記のとおり、内湾東岸南部において祇園貝塚が失われた現在、山野貝塚はこの地域を代表する大型貝塚であり、本遺跡のデータが提示されることにより、この地域の資源利用や社会の様相を理解することが可能となり、さらに地域間の比較も可能となる。このように、東京湾東岸域の縄文時代後・晩期社会の実態を